

## 地域創生学群 課題論文

### 【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時30分から14時30分まで(60分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に3ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章を読み、筆者の主張を簡潔にまとめたうえで、「サードプレイス」の存在が社会に与える効果および課題としてあなたが考えることを述べなさい。分量は全体で400字以内とする。

新型コロナウイルスによって、私たちの生き方、暮らし方は脅威にさらされ、そのあり方が根底から問われている。対面で人と会う機会が少なくなっているからこそ、私たちは人とのつながりをより強く求めていることに気づかされる。そうした中、生き方、暮らし方をより充実したものに変え得る「サードプレイス（第3の場所）」という概念が注目されている。

サードプレイスとは、米国の社会学者であるレイ・オルデンバーグが提唱した考え方である。家庭（第1の場）でも職場（第2の場）でもない第3の場、という意味になる。サードプレイスとは、英国のパブやフランスのカフェのように、とびきり居心地が良く、なじみの人々に出会えて、「まったり」とした時間を過ごせる場所のことである。ストレスの多い現代社会にとっては、潤滑油の役割を果たすといえるだろう。

オルデンバーグがサードプレイスを提唱した背景には、米国の都市化が、人々のつながりを希薄化させているという懸念があった。米国社会の特徴とは、自動車依存型の都市社会であった。そのため、車で家庭（第1の場）と職場（第2の場）を往復するだけの状態になっていて、サードプレイスが消滅してしまっていたのである。つまりオルデンバーグは、都市化で効率性が優先されるあまり、人々のつながりが希薄化していることに対して警鐘を鳴らしたと考えることができよう。

オルデンバーグは、サードプレイスには①中立性、②社会的平等性の担保、③会話が中心に存在すること、④利便性があること、⑤常連の存在、⑥目立たないこと、⑦遊び心があること、⑧もう一つのわが家——という八つの特徴があるとしている。この特徴は、多様で異質な人々が、自分の社会的立場を気にせず、気軽に集まり交流できる場、と表現できる。例えば、日本では地元の居酒屋などがこれに該当するだろう。留意すべきは、職場の近くの居酒屋ではないことだ。職場近くの居酒屋に、職場のメンバーと飲みに行けば、それはセカンドプレイスになってしまう。あくまで地元の居酒屋のように、多様なメンバーと、まったりと過ごす場であることが重要なのだ。た

だ、サードプレイスの種類は、もっと多様に広がりつつある。

サードプレイスとは異なる従来型のコミュニティとして、義務的共同体（地縁コミュニティ）がある。例えば、自治会や消防団のような地縁コミュニティは、地域が機能していくには欠かせない重要な存在である。しかし、参加が義務的であるコミュニティは、どちらかといえば第2の場所である職場に近い性質であり、人間関係は濃密であり、まったくして気楽に過ごせる場ではないかもしれない。そこで、もう少し気軽な場としてサードプレイスという選択肢が求められる。

サードプレイスの研究者である片岡亜紀子氏は、サードプレイスを3種類に区別している。マイプレイス型は、コーヒーチェーンやカフェなどで、個人がゆったりと過ごす場を意味する。社交交流型は、地元の居酒屋など、なじみの常連が社交の場として、にぎやかに楽しむ場であり、オルデンバーグが想定していたサードプレイスそのものである。目的交流型は、地域の非営利組織（NPO）、こども食堂、コミュニティカフェなど、なんらかの社会貢献、地域貢献などの目的が存在し、自発的に人々が集まる場を意味する。

筆者が注目しているのは、第3の「目的交流型」である。これは、オルデンバーグの想定していた社交交流型を、さらに進化させたサードプレイスと考えることができる。目的交流型では自発的に個人が自分の興味に従って、やりたいことを実現するために集まってくるので、そこには楽しさがある。同時に、その楽しさが何らかの社会貢献、地域貢献につながっていくので、充実感、達成感を味わうことができる。さらに、同じ目的を目指していく中で、多様な人同士のつながりが形成されていくのである。

サードプレイス、とりわけ目的交流型は、楽しみながら、多様な人とつながり、充実感と達成感をもたらす。新型コロナウイルスによって、私たちは自宅待機を余儀なくされたが、目的交流型は時間と場所の制約に柔軟に対応することもできるので、オンラインで交流していくこともできる。

ギリシャの哲学者アリストテレスは、同じ幸福でも、快楽を追求する幸福とは別に、「エウダイモニア」という、意義ある目的に向かって、困難を乗り越え、その結果、自己実現していくという幸福があったとした。

サードプレイスという場（オンラインも含めて）によって、エウダイモニアを実現

していくという生き方、暮らし方に目を向ける時が訪れているのではないだろうか。

(石山恒貴「生き方充実させる「第3の場所」」『週刊エコノミスト』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)